

不等号を用いた親への心理的距離測定の試み

目白大学心理カウンセリングセンター 土田恭史

目白大学人間学部 田中勝博

精舎児童学園 鈴木澄香

【要 約】

本研究では、等号(=)および不等号(>、<)を用いた親との心理的距離尺度の妥当性および信頼性の検討を行った。小林正稔・岩本晴代・田中勝博(1991)の親との心理的距離尺度の評価法と採点法を見直し、尺度の信頼性および妥当性を検討するため、自己イメージ尺度、および多次元自我同一性尺度(MEIS)と併せて大学生・大学院生208名(男性50名、女性158名、平均年齢19.54、SD=1.785)に実施した。親との心理的距離と自己イメージとの相関を検討した結果、それぞれの総得点および、柔和性に有意な正の相関が見られた。母親との距離が近い者ほど母親が自分のことをやさしいと認知しているというイメージを持ち、父親との距離が近い者ほど父親が自分のことを優しいと認知しているというイメージすることが示された。これは、親との心理的距離と他者からの認知との間に有意な関連が見られたことを示していると考えられた。このことから、不等号を用いた親との心理的距離の測定は、十分な妥当性と信頼性を持つことが示された。

キーワード：親子関係、心理的距離、不等号

目 的

現代は人と人とのつながりが希薄化した時代といわれている。学校や職場における対人関係に困難をきたしている人は多く、心理相談機関に援助を求められることは少なくない。家族関係もまた然りである。臨床心理学的な観点から見れば、家族とは最初の他者であり、家族との関係のあり方は、その人の対人関係の基礎となっている。人は乳児期から親や周囲の様々な人々との関わりを通し、彼らから期待され、是認される自己像を自分自身の中に形成していく。家族とのかかわりの中で、子どもは自分が他者に受け入れられる存在であることを学び、その感覚を基礎にして他者とのかかわりを強め、広げていくことができるのである。

親子関係の希薄さや親子の心理的距離のあり

方は、子どもの心理的安定に大きな影響を及ぼしている。たとえば、金子(1989)は、母親に対してネガティブなイメージを持ち、母親から離れてしまっている者は、内面的に充足されない状態にあり、同一性拡散感を持っていることを示唆している。

また、親子関係が重要な意味を持つのは幼少期のみに限らない。青年期になると、新たな経験としての性的成熟に直面すると同時に、これまでとは異なる大人の社会に入っていく準備のため、それまでの種々の自己像や同一化の再統合に従事しなければならない(松田君彦・広瀬晴次, 1982)。自己価値感・自己評価を維持する機能の形成過程において、青年期は重要な時期である。これを高く保つことが青年の適応や行動に重要な役割を果たしているが(中山,

2007)、同時にこの時期は心理社会的に不安定になりやすく(下仲, 1980)、一時的に肯定的な自己像を見失うことも少なくない。この時、今まで培われてきた強い家族の絆、家族の支えがあることを子ども自身が自覚していることが重要であるといわれているが、ここには子どもが感じる「親との関係の中での自分」、「家族の中での自分」イメージが子どもの心理社会的発達に寄与することがうかがえる。その意味では、実際の親子関係よりも子どもに認知された親子関係イメージに注目することが必要となる。

カウンセリング場面でも、対人関係の問題を抱えるクライアントの多くに、親との関係に葛藤を感じている人は少なくない。これらのクライアントの中には、実際のかかわりに見られる以上に親との距離を感じていたり、密接に感じていたりする人がいる。適切な心理的援助を行っていくにあたって、クライアントの抱える親子関係のあり方をアセスメントすることが有効であることは今更言うまでもない。成人のケースではこれを言語化することができるクライアントもいるが、子どもの場合、それを言葉にすることは難しく、カウンセリングにおけるかかわりの中で子どもの持つ家族イメージをアセスメントすることになる。その際にクライアントの親子関係を知る上で、親子の心理的距離を測定するための簡易で直観的な尺度がこれまでも求められてきたが、臨床場面で使いやすく簡便な尺度としては未だ十分なものは少ないといえる。

もちろんこれまでも、親子の心理的距離を測定する試みはなされてきた。たとえば親子の心理的距離に関する代表的な研究として、松井洋・中村真・堀内勝夫・石井隆之(2005)のものや、中村真・松井洋・堀内勝夫・石井隆之(2007)のものが挙げられる。これらの研究では父母に対する心理的距離をリッカート法で評定させるものである。これは、親との心理的距離を心理的な単位として数値化しなければならないため、思春期・青年期以前の子どもを対象とする場合には回答が難しくなることが考えられる。

これに対し、リッカート法によらない測定の

試みとして、小林ら(1991)が作成した「親との心理的距離尺度」がある。これは友だちと母親、友だちと父親を比較し、どちらの心理的距離が近いかを数学的等号(=)、不等号(<、>)によって記入させる20項目の質問紙である。不等号を用いることで父母への距離を直観的に表現することが容易となっており、非常に興味深い試みである。また、簡便であり、子どもを対象とした調査にも使いやすい尺度となることが期待される。しかし、この尺度は、評定された結果をいかに数値化し、分析するかが問題となっており、また、その後の検討がなされていないため、尺度としては更なる検討が必要とされていた。

そこで本研究は、①小林らの尺度の評価法を見直し、その妥当性と信頼性を検討する、②親子関係の認知と心理的距離との関係について検討することを目的とする。

手 続 き

まず、小林ら(1991)が作成した「親との心理的距離尺度」の評価方法を見直した。①父-母を直接比較する形に改め、②不等号の大きいほうに3点、小さい方に1点を与え、等しい場合(=)を2点、として得点化した。全20項目の父母それぞれの合計得点を母親得点、父親得点とし、この得点が高いほど、より心理的距離が近いことを示す。

妥当性の検討は、谷(2001)の多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS)、および長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道(1965)の自己イメージ尺度を用いた。なお、自己イメージ尺度は6つの下位因子のそれぞれから、因子負荷量の高い3項目を選定、研究者による表現修正を行った18項目とし、「現在の自分」、「母親から見た自分(母親推測自己)」、「父親から見た自分(父親推測自己)」について、5段階評定で自己イメージの評定を行った。

対 象 者

都内私立大学生・大学院生260名のうち欠損値を含まない208名(男性50名、女性158名、平均年齢19.54、SD = 1.785)を分析対象とし

た。次に使用する尺度について述べる。

①自己イメージ尺度

長島ら（1965）が大学生を対象にして構成したSelf-Differential尺度の6つの因子（向性、情緒安定性、強靱性、誠実性、過敏性、理知性）のそれぞれから、因子負荷量の高いものを3つずつ選定し、研究者間でワーディングや被験者への侵襲性に関する検討を行い、ふさわしい表現に修正した18項目からなる自己イメージ尺度を作成した。実施にあたっては、「現在の自分」、「母親から見た自分」、「父親から見た自分」のそれぞれについて評定を求めた。

②多次元自我同一性尺度（Multidimensional Ego Identity Scale ; MEIS）

青年期における自我同一性の構造を明らかにするために、谷（2001）が作成した「多次元自我同一性尺度」を使用した。これは、①自己の不変性および時間的連続性についての感覚を意味する「自己斉一性・連続性」、②自己意識の明確さを意味する「対自的同一性」、③他者から

みられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する「対他的同一性」、④自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」という4つの下位因子からなる尺度である。各因子は5項目、全20項目で構成されている。「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（7点）」の7件法によって回答を求めた。得点が高いほど、自我同一性の感覚が各側面において確かであることを表す。本尺度は、谷（2001）によって詳細に信頼性および妥当性が検討、確認されているため、本研究では谷（2001）が設定した下位尺度に基づき得点化を行った。

③親との心理的距離尺度

小林ら（1991）の作成した20項目の尺度である。全項目を表1にまとめた。項目は「あなたに～なのは？」とたずねる形式で、自分と父母とのかわりについて等号、不等号を用いて答える尺度である。

表1 心理的距離尺度の項目

-
1. あなたが安心できるのは？
 2. あなたの頼みを聞いてくれるのは？
 3. あなたを一人前に扱ってくれるのは？
 4. あなたによく話しかけてくれるのは？
 5. あなたに厳しいのは？
 6. あなたを手伝ってくれるのは？
 7. あなたとの約束を守ってくれるのは？
 8. あなたに期待してくれているのは？
 9. あなたに対する態度が変わりやすいのは？
 10. あなたの相談相手になってくれるのは？
 11. あなたのことについてやかましく言うのは？
 12. あなたの話をまじめに聞いてくれるのは？
 13. あなたが自分勝手だと思うのは？
 14. あなたの面倒をよく見てくれるのは？
 15. あなたを信用してくれているのは？
 16. あなたにいろいろとさせようとするのは？
 17. あなたに関心を持ってくれているのは？
 18. あなたの意見を尊重してくれるのは？
 19. あなたをいつも見守ってくれているのは？
 20. あなたを大切にしてくれているのは？
-

調査時期および実施方法

調査は、2007年5月中旬から6月中旬。講義時間内に集団法で実施した。個人情報保護に十分な配慮を行うこと、結果は研究以外には使用しないこと、質問紙への回答は強制ではないことを事前に教示した。

結果

(1) 自己イメージ尺度の因子分析の結果

心理的距離尺度との比較を行うために、自己イメージ尺度の因子構造および信頼性について検討した。分析には「現在の自分」「母親から見た自分」「父親から見た自分」の3つの自己イメージの間に共通する評価軸を抽出するため、父

からみた自分・母から見た自分・自分からみた自分のそれぞれの自己イメージ18項目を別々の被験者としてデータセットを作り、624名のデータとして因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。因子数はスクリープロットより判断して、4因子とした。ただし、因子負荷が0.30に満たなかった項目は削除し、再度、因子分析を行った。結果を表2に示す。

第1因子は「にぎやかな—静かな」「おしゃべりな—無口な」に高い負荷量を示し、明るさの高低を表わす軸と考えられたことから明朗性因子と命名した。第2因子は「温かい—冷たい」「優しい—厳しい」といった人格的に穏やかであるか否かを分ける項目への負荷量が高くなっ

表2 自己イメージ尺度因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	共通性
第1因子 明朗性 $\alpha = .763$					
にぎやかな—静かな	.782	.112	.257	.103	.700
おしゃべりな—無口な	.753	.134	.130	.051	.604
活発な—おとなしい	.617	.051	.559	.091	.704
冷静な—情熱的な*	-.435	-.037	.105	.155	.226
第2因子 柔和性 $\alpha = .774$					
温かい—冷たい	.269	.783	.113	.152	.722
思いやりのある—自分勝手な	.002	.642	.183	.343	.563
優しい—厳しい	.143	.640	.107	.057	.444
第3因子 活動性 $\alpha = .681$					
勇敢な—臆病な	.067	.168	.676	.201	.530
たくましい—弱々しい	.084	.102	.541	.172	.340
外向的な—内向的な	.466	.151	.535	.094	.535
安定な—不安定な	-.092	.315	.394	.272	.336
第4因子 誠実性 $\alpha = .728$					
きちんとした—だらしない	-.051	.109	.168	.645	.458
敏感な—鈍感な	.135	.068	.037	.524	.299
意欲的な—無気力な	.306	.299	.334	.500	.546
まじめな—ふまじめな	-.094	.336	.187	.482	.389
がまんづよい—あきっぽい	-.095	.333	.270	.428	.376
理知的な—感覚的な	-.295	.050	.161	.361	.245
寄与率	26.80	11.85	5.44	3.07	
累積寄与率				47.16	

主因子法 バリマックス回転
注) *は逆転項目

ていることから、柔和性因子と名付けた。第1因子は「勇敢な—臆病な」、「たくましい—弱い」、「外向的な—内向的な」などに高い負荷量を示し、活動的であるか否かを表わす軸と考えられたことから活動性因子と名付けた。第4因子は「きちんとした—だらしない」「意欲的な—無気力な」「まじめな—ふまじめな」などに高い負荷量を示し、まじめさを評価する軸であると考えられる。したがって、第4因子は誠実性因子と命名した。

尺度の信頼性を検討するため、各下位尺度の α 係数を算出したところ、第1因子が $\alpha = .763$ 、第2因子が $\alpha = .774$ 、第3因子が $\alpha = .681$ 、第4因子が $\alpha = .728$ となり、比較的高い内の一貫性が認められた。

本尺度はもともと6因子で構成されていた尺度であったが、今回の分析の結果、4因子が抽出された。これは項目数が変化したことによって因子構造が変化したことが要因と考えられる。そのなかで類似の傾向を持つ因子がまとまり、結果として4因子構造となったのであろう。しかし、尺度の内の一貫性が高いこと、また研究者間での検討において、内容的にもわかりやすく、自己イメージを評定するに足ると考えられた。以下では、各因子に負荷量の高い項目の点数の合計を、各下位尺度得点とした。

②現実自己と他者推測自己の差異について

次に「現在の自分」(以下、現実自己)と、「母親から見た自分」(以下、母推測自己)、「父親から見た自分」(以下、父推測自己)のイメージに

差異があるかどうかを検討するため、それぞれの自己イメージの得点の平均を求め、現実自己と母推測自己および父推測自己それぞれについて、対応のあるt検定を行った(表3)。

t検定の結果、現実自己と母推測自己では、明朗性($t(207) = 4.16, p < .01$)、柔和性($t(207) = 3.47, p < .01$)、活動性($t(207) = 6.92, p < .01$)、尺度全体($t(207) = 4.89, p < .01$)で有意差が認められ、いずれも母推測自己の得点の方が高くなっていた。また、現実自己と父推測自己では、柔和性($t(207) = 2.11, p < .05$)、活動性($t(207) = 7.52, p < .01$)、誠実性($t(207) = 2.07, p < .05$)、尺度全体($t(207) = 4.63, p < .01$)で有意差が認められ、いずれも父推測自己の得点の方が高くなっており、全体的に現実自己よりも、両親の目を通じて認知されている自己イメージの方が良いことが明らかになった。

(2) 多次元自我同一性尺度 (MEIS)

多次元自我同一性尺度 (MEIS) は、谷 (2001) によって詳細に信頼性および妥当性が検討、確認されているため、本研究では谷 (2001) が設定した下位尺度に基づき得点化を行った。信頼性係数は第1因子「自己斉一性・連続性」で $\alpha = .87$ 、第2因子「対自的同一性」で $\alpha = .86$ 、第3因子「対他的同一性」で $\alpha = .84$ 、第4因子「心理社会的同一性」で $\alpha = .87$ となり、いずれも高い内の一貫性が認められた。

表4は、MEISの下位尺度および全体の平均値と標準偏差を示したものである。性別による

表3 各自己イメージ尺度の平均得点

	自己イメージ		母親推測自己			父親推測自己		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t	平均値	標準偏差	t
明朗性	12.67	3.26	13.67	3.58	-4.16 **	13.01	3.45	-1.36
柔和性	9.77	2.28	10.44	2.78	-3.47 **	10.19	2.77	-2.11 *
活動性	11.25	2.94	12.92	3.31	-6.92 **	13.11	3.28	-7.52 **
誠実性	17.9	3.84	17.98	4.72	-0.26	18.61	4.57	-2.07 *
総得点	51.59	8.57	55.01	10.53	-4.89 **	54.92	10.46	-4.63 **

tは自己イメージと母親推測自己、父親推測自己との比較の結果を表す

表4 MEIS下位尺度・全体の平均値と標準偏差

	全体 (N=208)		男性 (N=50)		女性 (N=158)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
自己斉一性・連続性	20.56	7.53	23.36	8.16	19.67	7.11 **
対自的同一性	19.28	6.51	20.16	7.54	19.00	6.15
対他的同一性	17.59	5.14	17.96	5.48	17.47	5.04
心理社会的同一性	19.75	4.00	20.66	4.11	19.46	3.93
MEIS全体	77.17	17.67	82.14	18.58	75.60	17.14 *

**p<.01 *p<.05 †p<.10

t検定を行った結果、自己斉一性・連続性 ($t(206) = 3.08, p < .01$)、MEIS全体 ($t(206) = 2.30, p < .05$) で有意差が認められ、男性より女性の方が低かった。他の下位尺度においては、有意差は認められなかった。

(3) 親との心理的距離尺度

友だちと母親、友だちと父親を比較し、それぞれどちらの心理的距離が近いかを不等号によって測定し、全20項目の合計得点をそれぞれ母親との心理的距離得点(以下、母親得点)、父親との心理的距離得点(以下、父親得点)とした。得点が高いほど、より心理的距離が近いことを表わしている。表5は、親との心理的距離尺度における母親得点と父親得点の平均と標準偏差を示したものである。

尺度の因子構造について検討するため、父親得点、母親得点のそれぞれについて主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、父親、母親とも同様の2因子構造が得られたため、父親および母親の得点を合わせた414ケースに対して、再度主因子法バリマックス回転による因子分析を行ったところ、父親、母親得点と同じく2因子が得られた(表6)。まず、第1因子は「あなたの話をまじめに聞いて

くれるのは?」、「あなたを信用してくれているのは?」、「あなたの意見を尊重してくれるのは?」など、親を身近で、肯定的にとらえる因子と考えられたため、「親和性」因子とした。次に第2因子は「あなたのことについてやかましく言うのは?」、「あなたが自分勝手だとおもうのは?」、「あなたに対する態度が変わりやすいのは?」など、親を口やかましく、身勝手に信じられないと感じる因子を考えられたため、「不信感」因子とした。なお、因子の内容から「不信感」因子を逆転項目として合計得点を算出することとした。親との心理的距離尺度の信頼性について検討したところ、 $\alpha = 0.9$ と高い信頼性が示された。また、下位尺度の信頼性は「親和性」が $\alpha = .898$ 、「不信感」が $\alpha = .672$ であった。

母親得点と父親得点の連関を検討するため、相関係数を算出した結果、母親得点と父親得点に有意な相関が認められた($r = .45, p < .001$)。また、母親得点と父親得点の差異を検討するため、対応のあるt検定を行った。その結果、母親得点は父親得点より有意に得点が高く($t(207) = 6.02, p < .001$)、父親よりも母親との心理的距離が近いことが明らかになった。なお、母親得点および父親得点について性差は認められなかった。

表5 親との心理的距離得点の平均

母親得点	父親得点	t値
42.65	37.75	6.02**
(6.36)	(6.36)	

**p<.01

(4) 心理的距離尺度の妥当性の検討

次に親との心理的距離尺度の妥当性について検討するために、自己イメージ尺度および多次元自己同一性尺度との相関係数を算出した。まず、自己イメージ尺度で有意な相関を示したのは、母親では「不信感」と母推測自己の「柔和

表6 親との心理的距離尺度の因子分析結果

	F1	F2	共通性
12. あなたの話をまじめに聞いてくれるのは？	.831	.040	.693
15. あなたを信用してくれているのは？	.798	.122	.652
18. あなたの意見を尊重してくれるのは？	.795	-.001	.632
19. あなたをいつも見守ってくれているのは？	.790	.182	.658
6. あなたを手伝ってくれるのは？	.759	.163	.603
20. あなたを大切にしてくれているのは？	.756	.284	.652
10. あなたの相談相手になってくれるのは？	.753	.128	.584
1. あなたが安心できるのは？	.742	.100	.560
14. あなたの面倒をよく見てくれるのは？	.725	.190	.561
2. あなたの頼みを聞いてくれるのは？	.717	.021	.515
17. あなたに関心を持ってくれているのは？	.709	.331	.613
7. あなたとの約束を守ってくれるのは？	.679	.081	.468
4. あなたによく話しかけてくれるのは？	.640	.280	.488
8. あなたに期待してくれているのは？	.550	.374	.442
3. あなたを一人前に扱ってくれるのは？	.496	-.010	.246
11. あなたのことについてやかましく言うのは？	.273	.706	.573
5. あなたに厳しいのは？	.112	.697	.498
9. あなたに対する態度が変わりやすいのは？	.095	.649	.430
16. あなたにいろいろとさせようとするのは？	.288	.604	.448
13. あなたが自分勝手だと思うのは？	-.199	.538	.329
寄与率	43.45	9.77	
累積寄与率		53.22	

主因子法 バリマックス回転による

表7 親との心理的距離と推測自己イメージの関連

	父親との心理的距離			母親との心理的距離		
	親和性	不信感	総得点	親和性	不信感	総得点
明朗性	.170 *	-.068	.171 *	-.021	.080	-.049
柔和性	.246 **	-.192 **	.284 **	.054	-.148 *	.104
活動性	.199 **	-.208 **	.250 **	-.092	-.014	-.072
誠実性	.077	-.096	.103	.037	-.027	.042
総得点	.217	-.181 **	.255 **	-.005	-.028	.007

性」($r = -.148^*$)、父親では「親密感」と明朗性($r = .17^*$)、柔和性($r = .246^{**}$)、活動性($r = .199^{**}$)、「不信感」と柔和性($r = -.192^{**}$)、活動性($r = -.208^{**}$)で見られた(表7)。なお、多次元自我同一性尺度との相関は認められなかった。

考 察

本研究では、等号および不等号を用いた親との心理的距離尺度の妥当性および信頼性の検討を行った。親との心理的距離と自己イメージの相関を検討したところ、それぞれの総得点に有意な正の相関が見られた。また、下位尺度間にいくつかの有意な正の相関が認められたが、もっとも心理的距離と有意な相関が見られたのは、父・母推測自己における柔和性であった。これは、母親との距離が近い者ほど、母親から自分は優しいと認知されていると感じており、父親との距離が近い者ほど父親から自分は優しいと認知されていると感じていることを意味すると考えられた。つまり、母親への信頼感が低く、距離が近い者ほど母推測自己として優しい自己イメージを持ち、父親に親密感じ、信頼しやすいと感じる対象者ほど父推測自己として優しく、活動的な自己イメージを持つことが示された。これは、親との心理的距離と他者からの肯定的にイメージされているとする認知との間に有意な関連が見られたことを示していると考えられた。このことから、不等号を用いた親との心理的距離の測定は、十分な妥当性と信頼性を持つことが示されたといえよう。

また、本研究の中でいくつか興味深い点が見られたので考察したい。まず対象者の自己イメージについてであるが、現実自己と母推測自己、現実自己と父推測自己に見られる自己イメージの違いを検討した結果、現実自己よりも母推測自己の活動性、明朗性、柔和性、総得点が有意に高かった。また、現実自己より父推測自己の活動性、柔和性、総得点が有意に高く、現実の自己イメージよりも親からみた自己の方がより活動的で柔和であると評価する傾向がみられた。この結果は非常に興味深いものであった。思春期・青年期においては、親との心理的自立と自我同一性の確立が精神発達の課題とさ

れ、親から見た自分と現実の自分との違いを意識しやすい時期である。そのため親から見られている自分と現実の自分との間に違いを感じていることはおかしなことではない。ただし、本研究からは、この年代の青年が、親から見た自分は現実の自分に比してよりポジティブなものであろうと認知していることは留意すべき点であろう。なお、この傾向は父親よりも母親との関係でより顕著であった。

これをふまえ、母親と父親に対する心理的距離の差異を検討した結果、父親得点より母親得点の方が有意に高く、青年は父親より母親と親密さを感じていることが明らかになった。金子(1989)は、幼少期から、子どもは母親と最も密接な結びつきがあり、青年期になって親友を得ても、大部分の者は母親との結びつきが大きく崩れることがないことを指摘しているが、本研究の結果からも青年期における子どもと母親の結びつきの強さが示された。また、親に対する心理的距離が自己イメージ、特に親から見られている自分のイメージと密接にかかわっていることがうかがわれた。

これらのことから、親との心理的距離を測定する上で、不等号を用いた簡便な形式である本尺度を用いても、十分な意味のあるデータ測定が可能と考えられた。本研究の結果を元に本尺度の有用性について、さらに検討していく必要があるだろう。

また、本研究では親への心理的距離の測定について検討したが、親、つまり他者に見られている自分についてのイメージの測定は、親子関係の研究のみならず、その人の対人関係について研究する上でも非常に重要なものである。たとえば相手との関係性が非常に重要となるものとして、カウンセリングをあげることができるだろうか。カウンセリングにおいて最も重要なものは相手との関係性であり、相手との関係の中でカウンセリングは有効に機能するといえる。そのためカウンセリングにおけるかかわりについて検討する上では、カウンセラー—クライアント関係を考慮に入れなければならないが、これは非常に繊細で難しい問題であり、現在でも大きな課題となっている。また、複雑な調査手続きがカウンセラー—クライアント関係

に与える影響も考慮すると、簡便な形式の研究法が求められる。今後もこの形式による親子の心理的距離などについて検討すると同時に、臨床にも応用可能な、二者関係、あるいは三者関係における他者との心理的距離の測定についても視野に入れて検討していきたい。

文献

- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 小林正稔・岩本晴代・田中勝博 (1991). 思春期の依存に関する基礎研究—中学生を対象とした親との心理的距離について— 日本心理臨床学会第10回大会発表論文集, 350-351.
- 松田君彦・広瀬晴次 (1982). 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, 30, 2, 157-161.
- 松井 洋・中村 真・堀内 勝夫・石井 隆之 (2007).

- 非行的態度の抑制要因に関する研究 (I). 川村学園女子大学研究紀要, 16, 1, 27-44.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 (1965). 自我と適応の関係についての研究 (1)—Self-Differential作製の試み— 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106
- 中村 真・松井 洋・堀内 勝夫・石井 隆之 (2007). 親子関係と青少年の非行的態度II: 親子双方の視点から, 川村学園女子大学研究紀要, 18, 1, 123-140.
- 中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程—自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から— パーソナリティ研究, 15, 2, 195-204.
- 下仲順子 (1980). 青年群との対比における老人の自己概念—世代差, 性差を中心として— 教育心理学研究, 28, 4, 303-309.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造: 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究, 49, 3, 265-273.

Study of measuring psychological intimacy to parents by sign of inequality

Takashi Tsuchida Mejiro University, Psychological Counseling Center
Masahiro Tanaka Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Sumika Suzuki Syoja Jidou Gakuen Children's Home

Mejiro Journal of Psychology, 2009 vol.5

【Abstract】

This study, it was examined the validity and reliability of the scale of psychological intimacy to parents, that was used equal sign (=) and sign of inequality (>, <). First, we revised the evaluation method and the scoring system for the scale of psychological intimacy to parents by Kobayashi et al., (1991), and to examine reliability and validity. It was executed 208 subjects (50 men, 158 women, the average of age 19.54 SD=1.785) along with the self-image standard and the multiple ego identity scale (MEIS). As a result, it was examined significant positive correlation between the psychological intimacy and the self-image. So, it was shown, this scale had enough validity and reliability.

keywords : parent-child relationship, psychological distance, intimacy, sign of inequality